



No.55 2020.5.26

明石市コミュニティ・スクールだより

人をつなぎ 未来をつなぐ 明石のコミュニティ・スクール

コミコミスクスク

KOMIKOMISUKUSUKU

明石市教育委員会事務局学校教育課

動き始めている ひろがり・つながる ZOOM 会議

新型コロナウイルスの中で Zoom 等 Web 会議システムが注目を集めています。これまで Zoom 体験会等に参加してきましたが、今回はコミュニティ創造協会が開催された「ジチラボオンライン ～みんなでつくるみらいの自治～」に参加させていただきました。西は福岡、東は新潟・東京から20名近くが集まり、それぞれの地域の状況や取組等の情報交換から今後の地域づくりに向けてのディスカッションでした。参加してみて、私のこれまで知らなかった世界の話題で、学校の外では学校の知らない地域のつながりが見えてきたり、今回の状況で見えてきた地域づくり上の課題や、こうしたオンラインの活用など刺激的なあっという間の2時間でした。参加してみて、校区の中でも保護者の方や地域の方とこうした自由なディスカッションできる場をつくり、充実させていくことが「いい学校づくり＝いい地域づくり」につながっていくのだろうなと思いました。そして Zoom がそうしたディスカッションの場をつくる強力なツールになるのだろうなと感じました。そしてディスカッションに子どもが参加してくるようになったら…。



オンラインで開催された「明石市連合まちづくり協議会広報部会」にも参加させていただきました。現在、いろいろな集まりがストップ状態の中で、まず広報部会を Zoom でスタートさせてみようと思われ、コミ創さんのスタッフが総出でフォローに入った開催でした。各会長さんからの近況報告から、各校区の状況等を出し合いながらどんな広報誌をつくっていいかと熱心な話し合いが行われ、取材は難しいから、各校区でこうした状況の中で工夫したアイデアを持ち寄って紹介していいという話になりました。参加された会長さんたちは慣れるのが早く、積極的な話し合いが行われたのには改めて Zoom の可能性を感じさせられました。

オンライン学校運営協議会が開催されました

5月20日(水)に朝霧小コミュニティ・スクール学校運営協議会がオンラインで開催されました。私自身がこうした会議のホストデビューということもあり、スケジュールで設定した会議室が開くのか、皆さんが入ってきていただけるのか不安で



したが、なんとか無事スタートすることができました。コミュニティ創造協会のスタッフがフォローに入ってくださり、接続が不安な運営委員さんも校長室からネットにつないで参加していただくことができました。最初は戸惑いながらも各委員さんが Zoom でつな



がりながら、結構活発に意見の交流ができたように思います。校長先生もパネルを使っでの学校経営方針の説明など工夫され、教頭先生のファシリテートのうまさも加わり無事に会を終えることができました。議事の中でも Zoom を活用してふだん集まれない人も巻き込みながら学校づくり＝地域づくりをすすめられたらと、リアルな場だけでなく、Zoom の活用も話題にのぼりました。

今回はモデル校の松が丘・二見北からも見学として参加していただくことができ、いろいろな立場の人が集まれる場としての Web 会議システムの可能性を感じました。最後は参加者のみなさんで画面上での記念写真を撮っての閉会となりました。まだまだ慣れが必要ですが、まず体験ですね。Zoom を使ったの学校運営協議会の開催を考えられるようでしたらご相談ください。

対話から生まれる 安心⇒満足⇒信頼の正のスパイラル

コミコミスク No.54 を読まれた方からこんなメッセージをいただきました。

今回の内容は、まさに今保護者として思っている内容そのものでした。

国語や算数はいいのですが、副教科が大変です。音楽の宿題にいたっては、「“おぼろぎよ”を保護者と一緒に歌いましょう！」って書いてるんですよ、怒。

他にも「親と一緒に」というのがあって、学校は親も休校の児童と一緒に家にずっといると思っているのでしょうか。

・
・
・

No.54で紹介した妹尾昌俊さんの記事や明石の学校のホームページのせられたメッセージ、そしてこのメッセージを読まれてどう思われますか。学校が再開になり、子どもたちが本格的に本年度のスタートを切る前に、こうしたメッセージについてまず、校内での対話が必要なのではと思っています。

これらのメッセージは、まさしく不安が不満になり、不満が不信に高まっていく負のスパイラルです。

学校側からみると宿題としては子どもたちのためと考えての宿題の提示であり、今までの長期休業の宿題の多くはこうした内容で出されていたと思います。しかし、それはこれまでの世界の中でのことであり、現在の状況の中ではどうだったのでしょうか。コロナ禍の中で我々は「いかに子どもたちの学びを止めず続けるか」といった、これまで直面したことのない問題に、何の準備もないまま突然直面したのです。答えはだれも持っていない中で、どの教科もまんべんなく取り組めるように配慮し、今までどおりのことをそのまましたのだと思います。

子どもたちの状況は？家庭の状況は？・・・、いろいろな要因を考え想像力を働かせ、前例にとらわれず、必要なことは何なのかを想像して、新たな取組を創造していくという“2つのそうぞう力”をベースにした発想が我々には欠けていたのではと思っています。こうしたメッセージを教訓として、不安を安心にかえ、安心するから満足できる、そして満足できるから信頼が生まれるという正のスパイラルにかえていく仕組みを考えていくことが必要だと思っています。しかし、そうした仕組みはまだだれもどんな仕組みかわかりません。想像と創造の“2つのそうぞう力”を働かせる原動力になるのが、“対話”なのだと思います。また、新たな取組に挑戦する場合、“石橋をたたかずにわたってみる”ことも必要です。その時の勇気も対話を重ねる中で生まれてくるのだと思います。学校・家庭・地域の対話の仕組みを創り、新たな学びを創造していくのがコミュニティ・スクールであり、新たな仕組みづくりに向けたスクラップ&ビルドだと考えています。まず、校内でコロナ禍が浮き彫りにした課題について対話しながら、これからの時代に向けた学びと育ちの仕組みを考えていただけたらと思います。これからの学校づくり=地域づくりに向け、先生方と保護者の方、そして地域の方が対話できる場を創ることができたらと考えています。

(文責:北本)